

講座 日本現代詩史

講座 現代詩史 日本

Ⅰ

明治期

村野四郎
関良一
長谷川泉
原谷子朗
編

右文書院

編 者 紹 介

村野四郎（むらの・しろう）

明治三四年一〇月東京都生まれ。慶
応義塾大学経済学部卒。東京教育大
学講師。現住所・東京都文京区千石
2-13 〒112

関 良一（せき・りょういち）

大正六年一二月東京都生まれ。東京
文理科大学国文科卒。専修大学教
授。現住所・東京都練馬区大泉学園
町2624 〒177

長谷川泉（はせがわ・いずみ）

大正七年二月千葉県生まれ。東京大
学国文学科卒。学習院大学講師。現
住所・東京都文京区西片1-1-11 〒
113

原 子朗（はら・しろう）

大正一三年二月長崎県生まれ。早稲
田大学文学部卒。立正女子大学教授
現住所・東京都練馬区練馬2-31-2
〒176

講座・日本現代詩史（全4巻）

第一巻 明治期

昭和48年12月10日 印 刷

昭和48年12月15日 発 行



編 著 者

村 野 四 郎

関 良 一

長 谷 川 泉

原 子 朗

発 行 者

三 武 達

発 行 所

右 文 書 院



101

東京都千代田区神田小川町 3-24
振替東京109838/電話03(292)0460

★落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

臺陽印刷・三恵印刷・加藤製函・大和工業所

（分）0392-（製）731110-（出）8614

はし が き

本巻は、『講座日本現代詩史』全四巻の第一巻「明治期」である。したがって、およそ十九世紀中葉から二十世紀初頭にわたる「日本近代詩」の、その草創期から第一次の、いわゆる「浪漫詩」という形での、さらに第二次の、同じくいわゆる「象徴詩」を芯とする開花期へのプロセス、その間の詩業の達成について、新しい視座からの解明・評価を試みることをおもなねらいとしている。

しかし、いま、あえて「新しい視座」と記したように、この講座の編集を委嘱された私の念頭を去らなかつたのは、第一に、先史ないし伝承の時代からの日本列島あるいは日本語列島の「ことば」およびそれに絡んだ「うた」の始原的なありかたへのアプローチから出発し、七・八世紀、いわゆる近江・奈良朝時代を最初のピークとする中国の「詩」の伝来・摂取、さらに十五・六世紀、いわゆる大航海時代以降の西洋の「ポエトリー」の渡来との消息への目くばりをも忘れることなく、そのことによって、このユーラシア大陸のさいはてに位置している日本における「詩歌的なもの」の原型・変容・本質ないしは宿命、のときものをトータルな形でとらえ、少なくともそれとの関連において、島崎藤村の言うところの「新しき詩歌」の位相を巨視的に浮き彫りすることであり、第二に、「詩」「詩史」を「文学」「文学史」一般との有機的な関連において考察することであり、第三には、特に近代における「詩論」「詩学」の優先的な役割りを看過しないことであつた。本巻の各章、なかならず第一・二・三・四・十一の各講の主題は、そのような意図に基づいている。

この講座が企画されたのは一九七〇年の晩春のころで、爾来この種の刊行物としては上梓までに短かからぬ歳

月が費やされたが、各章がそのことに十二分に見合った創見に満ちた労作であることを私は信じて疑わない。斯
学の耆宿きしゆくであられる野田宇太郎氏・松村緑氏をはじめ、快く御執筆・御協力を賜わった各位にはもとより、面倒
な編集業務を終始辛抱強く推し進められた右文書院に対しても深く謝意を表する次第である。

昭和四十八年十月

関 良 一

はしがき

第一講 伝統詩歌と近代詩

関 良一

- 1 「詩」「歌」ということば……………三
- 2 日本のことばと「うた」と……………三
- 3 「うた」から「近代詩」へ……………三
- 4 文字づかいと音律と……………三

第二講 明治という時代

平岡敏夫

- 1 明治という時代の出発と詩歌……………三
- 2 国民的感懐と個人的感懐……………四
- 3 明治三十年代のナショナリズムとその底音……………五
- 4 国家と詩・文学―啄木……………五

第三講 近代詩の黎明

千葉宣一

1	問題の視角と範圍	三
2	ギリシャ・ラテン文学の波動	七
3	キリシタン文学の詩的諸相	七
4	「三国祝章」(大槻平泉稿)の意義	三
5	「やよひの歌」(中島広足訳)の意義	七
6	「思ひやつれし君」(勝海舟訳)の位相	七

第四講 明治の漢詩——中野逍遙をめぐって——

前田 愛

1	はじめに	一五
2	藤村の「哀歌」——漢詩と新体詩の唱和	一七
3	〈劍〉と〈琴〉のロマンティズム	二二
4	結晶作用	二六
5	乱調の軌跡	三四

第五講 新体詩の形成

長谷川 泉

第六講 劇詩と叙事詩

劍持武彦

1	讚美歌と小学唱歌	一三
2	『新体詩抄』	一五
3	『於母影』	一五
1	長詩型と短詩型	一六
2	『新体詩抄』の叙事詩的性格	一六
3	湯浅半月『十二の石塚』の成立	一六
4	山田美妙編『新体詞選』の叙事詩的特色	一七
5	劇詩『蓬萊曲』の問題	一七
6	井上巽軒『孝女白菊詩』の意義	一八
7	落合直文『孝女白菊の歌』と塩井雨江『湖上の美人』	一八
8	明治長詩の性格	一八

第七講 浪漫詩の開花

佐藤泰正

第八講 「明星」と「文庫」

1	はじめに	一五
2	藤村―その浪漫詩に底流するもの	一五
3	『若菜集』以前	二〇
4	藤村―その浪漫詩の終結	二〇

I 「明星」の詩風―鉄幹・晶子を中心に

新聞進一

1	「明星」の詩的位相	二九
2	「明星」に見る鉄幹の詩	三三
3	詩人としての鉄幹・晶子	三六
4	新詩社の活動と社内外の詩人たち	三三

II 泣菫・清白・夜雨の詩業

松村 緑

1	泣菫の詩業	三九
---	-------	----

2	清白の詩業……………	三四
3	夜雨の詩業……………	三六
4	詩人たちの後半生……………	三五

第九講 象徴詩の移入と展開

石 丸 久

1	ヴェルレエヌ故国に逝き日本に生まれる……………	三九
2	ヴェルレエヌの「詩法」……………	三六
3	上田敏の「幽趣微韻」……………	三七
4	上田敏による象徴派の紹介……………	三九
5	ボオドレエルと上田敏・永井荷風・蒲原有明……………	三八
6	蒲原有明の象徴詩論……………	三六
7	『海潮音』の象徴意識……………	三九
8	「象徴」の定着と象徴詩風の展開……………	三九

第十講 「パンの会」と耽美派詩人の誕生

野田 宇太郎

- 1 象徵主義の受容 三〇七
- 2 「パンの会」前期 三二三
- 3 「スバル」と「屋上庭園」の創刊 三二七
- 4 「パンの会」後期 三三九
- 5 耽美主義の結実 三三三

第十一講 明治詩論史

角田 敏郎

- 1 新詩待望の機運 三三七
- 2 内外詩観の統一過程 三三二
- 3 形想二元論の諸問題 三三〇
- 4 詩論展開の二方面 三二五

付録

明治詩誌解題

杉本邦子編

日本現代詩史年表

小川和佑編

第一講 伝統詩歌と近代詩

関

良
一

1 「詩」「歌」ということば

「伝統詩歌と近代詩」という問題、特に両者の関連について、またそれを通じて日本における「詩的なもの」のあり方について考えるためには、まず、これまでとかく検証ぬきで、いわば自明のことばとして手軽く用いられた「詩」「歌」のたぐいの術語（？）の国籍・系譜・音訓・意味・用法などについて多少の検討を加えてみる必要がある手づきではなからうか。

改めて言うまでもないことだろうが、「詩」は漢字＝漢語であり、「歌」も漢字であり（「し」もそうだが、特に「か」のほうは、そう仮名で記すと、意味不明に陥るおそれがある）、「か」と読む限りは漢語でもある。字音語は、原則として一字語は訓読され、二字以上の語は音読されるのだが、「詩」は原則どおりほとんど訓読されないのに反して（訓は「からうた」、「歌」のほうは多く「うた」と訓読される。その間の事情については後に触れるが、とにかく、そのように「中国」の言語・文字を藉りなければほとんど何ごとをも述べ得ないところに、私たちは日本列島あるいは日本語列島の地理的、歴史的、文化的な、さし当たっては言語的、文芸的な宿命を見いださなければならぬだろう。それに似た状況は、中国文化圏の周辺に位置する諸民族文化だけでなく、ギリシャ・ラテン文化圏の周辺にも見いだされるだろう。とにかく、「詩」は、もともと舶来の漢詩のことであり、転じて、

それを模した、いわば仿製鏡にも似た日本漢詩(?)の謂だった。もつとも、それらは日本人によって読まれ、作られる、特に訓読され、時には書き下されることで、また、日本漢詩は、おそらく和文漢訳の所産であることで、それぞれ「日本の詩」であり、少なくとも「国姓爺」ふうの合の子ではあったが。

「詩」は、近代にはいって、『新体詩抄』の「凡例」に、

均シク是レ志ヲ言フナリ、而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ総称スルノ名アルヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ「ポエトリ」ト云フ語即チ歌ト詩ヲ総称スル名ニ当ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ、

とあるあたりをきつかけにして、舶来の西詩を、転じてその訳詩、およびそれらを模した「新体詩」、『詩抄』の語に忠実に従えば「新体ノ詩」をさすことばに転用された。巽軒居士井上哲次郎の記したこの「凡例」の文脈では、「詩」は「詩」＝漢詩と「歌」＝和歌との総称であるようにも受け取れるが、実は、『詩抄』の同じ巽軒の訳詩「玉の緒の歌(一名 人生の歌)」の前書きに、

夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新体ノ詩ノ作ル所以ナリ、

とあるように、『詩抄』の人々は、和歌、特に短歌、それから発句・川柳などの短詩型文学、それに漢詩を否定することを目ざしたから、「詩」は、「古歌」でも「古ヨリイハユル詩」すなわち漢詩でもなく、やはり「泰西ノ『ポエトリ』」の訳語だったと見てよい。ただし、巽軒たちは、「詩」＝「ポエトリ」として、西欧の抒情詩、叙事詩ふうの長詩、劇詩の一部などを思い浮かべてはいたらしいが、後に触れるS・S・S.とは違って、「ポエ

トリー」＝創作文芸一般と見なす古典的「詩学」（「詩学」の語は「凡例」に見えているが）にまでは立脚していなかったようだ。そこにもともと漢詩人・漢詩改良家だった巽軒の本来の面目を見いだすべきかも知れない。中国の詩論では、「詩」は文学の総称ではなかったのだから。なお、明治一〇年代以降は「漢詩」「新体詩」の並存した時代だったが、明治四〇年代から大正初年代にかけて、前者の衰退に伴い（「詩人」漱石山房主人夏目金之助は大正五年に、同じく鷗外漁史森林太郎は同十一年に没した）、「新体詩」は単に「詩」と呼ばれるようになった。

「新体ノ詩」ということは、私の考えでは、もともと巽軒が、律詩・絶句以前の「古詩」あるいは「古体詩」、以後の「近体詩」のいずれとも異なる、西詩ふうの長編漢詩、たとえばスコットの『湖上の美人』、ロングフェローの『エヴァンジリン』などに示唆されて制作した自身の長編漢詩「孝女白菊（ノ）詩」（構案では「十有余齣」、実際に制作・発表されたのは全三齣・四百四行）のような新漢詩に与えるべきジャンル名として考案したものだ、その名を尚今居士矢田部良吉訳の「シェークスピアール氏ハムレット」中の一段「すなわち「ながらふべきか但し又　ながらふべきに非るか云々」のような「詩」のために提供・転用し、それゆえに「漢詩でない、日本語ないし仮名交じり体による、西詩ふうの（原則としては）長詩」を意味することばに変質し、そのようなものを意味することばとして確立・流布された。しかし、『詩抄』の人々が、「泰西ノ『ポエトリー』を「詩」という漢語で重訳（？）したことは、「古詩」すなわち漢詩を衰退させることには役立ったかも知れないが、「古歌」・発句・川柳などを追放しようとする意図とは逆に、むしろ和歌・俳諧・川柳などの、もろもろの伝統的、土着的な「詩歌」形態を、「詩」の圏外の、しかしそれと併存する「詩的なもの」として温存することにも役立ってしまったかも知れない。「詩」ということばが、伝統的、土着的な「詩歌」群の頭ごしに、漢詩系のその意味から

西詩系のそのの意味にと移行させられたことは、そのことばを標識とする「近代詩」が、伝統的、土着的な、いわば固有の「詩歌」群を完全には汲み上げ、統^すべ得なかつたことの表われであり、それは、結局は日本における「詩的なもの」の多様さ、多元的、重層的な、あるいは雑種的なあり方を象徴するできごとだったろう。

ところで、「詩」「歌」という漢語の意味を説いたもっとも古い文献は、前の『詩抄』の「凡例」の「是レ志ヲ言フナリ」の典拠でもある『尚書』の「舜典」(「舜典」は偽『古文尚書』の篇名だから正しくは「堯典」らしい。「舜典」には「詩ハ志ヲ言ヒ、歌ハ言ヲ永ウシ、声ハ永キニ依リ、律ハ声ヲ和ス」とあるから、文字通りに読めば、その文意は、「詩」は人間の心情なり意志なりをことばで表現するもの、「歌」は、そのことばを声を長くひいて吟詠するもの、ということになりそうだが、「詩」イコール「志」というのは音通にもとづくし、^{や、れ}かも知れず、「歌」イコール「永言」というのも「詠」字を分解した字戯だったかも知れない。第一、「詩ハ志ヲ言フ」では、「詩」と(散文を主とする)言語表現一般との違いがちつとも判らない。右の引用文は、実は中国好みの対句^{たいく}なので、そのことも文意を判りにくくしているようだ。私の考えでは、原文の対句にひかれて「詩」と「歌」とを対照的に思い浮かべてはいけなないので、「歌」とは旋律・曲節を、時には伴奏である「楽」をも伴った歌曲^{ソング}のことであり、「詩」とは、その「歌」の純粹に言語的な(したがって文字化が可能な)契機、つまり歌詞^{歌詞}のことだろう。図式化して示せば、詩↓歌ではなく、詩↗歌となろう。「詩」は「楽」と関わる「歌」(「歌う」という行為)の詞^{ことば}なのだろう。事実、「舜典」の右の記述は、「楽」のあり方、教え方についての教訓の一節なのである。『毛詩』の大序は、右の「言志説」的な詩論を、

詩ハ志^{こころ}ノ之^{これ}ヲ所ナリ。心ニ在ルヲ志ト為シ、言ニ発シタルヲ詩ト為ス。情中^{こころ}ニ動キテ、言ニ形ハル。之ヲ言